

福 島

第33号

自由人



発行 北斗の会



記憶の中の母

松山 カオリ

夏の終わりのエール

今年の夏の暑さは例年になく厳しく、豪雨による洪水被害も加わって、うっとうしい日が続きました。

さらに憂鬱な気持ちに拍車を掛けたのが、某有名医科大学が行った女性差別問題です。

文部科学省官僚による不正入学疑惑に端を発した一連の騒動は、フェアであるべき大学の入学試験で、この医科大学が長年にわたり、女子と三浪以上の受験生に一律の減点を行っていたことをあぶり出しました。その結果、この大学は、国内のみならず世界中から批判されることになったのです。

女子減点の理由が、「女性は結婚で辞めるから」「女性は体力的に厳しい外科や救急に行きたがらないから」だと、

大学側が言い訳してみた発言に終始するのを、テレビを通して苦々しい想いで眺めながら、外科を志したり、医師を一生続けたりする女性は、そんなに少ないだろうかと首を傾げました。

というのも、私の人生は、優れた女医さんに支えられてきたからです。

思いの外、長くなつた東京での生活で、私と妹の主治医となつて下さったのが、ひとりの女医さんでした。

この女医さんは、なんと太平洋戦争中に日本で医師免許を取ったというトルコの方で、六本木の旧テレビ朝日通りに医院を開業されていました。卒業したのも日本の医大。戦時中は外国人が迫害されたという思い込みがありました。トルコは日本の友好国だということで、医師免許の取得さえ可能だったそうです。

見た目こそ違うかもしれませんが、日本暮らしが長い

めか、言葉から身のこなし方まで、他の日本人と何ら変わりありません。同じ感覚でお喋りできたこともあり、せわしない東京暮らしの中で、数少ない心許せる存在になりました。

症状や要求をきちんと伝えられない患者には、きつぱりと注意をすることもたびたび。健康面のアドバイスも、なかなか厳しくはありましたが、内科でありながら心のケアもまた専門分野で、診察していただくたびにほっと心が落ち着いたものです。

外国の方であることを、つい忘れてしまうほどでしたが、ある日患者としていらしていたトルコ大使館の方と、母国語でお話になっているのを耳にし、ようやくトルコの方だったと思い出したこともありました。

そのままずっと診ていただくつもりでしたが、長年続いていた医院に、六本木ヒルズ建築による降って湧いたような移転問題が持ち上がりました。先生ご夫妻は、住宅地の多い他の区に移ることに。さすがにもうご高齢だから、医院は閉められるのだろうとがっかりしていたところ、新しく移った自宅の裏玄関側にある一室を潰し、診療室とミニ待合室を用意してくださったとの知らせがありました。これはうれしき驚きでした。

先生曰く、「長年医師を天職と思ってきたので、やはり医院を再開したいと思ったの」。

申し訳ないと思いつながら、またお世話になれると、ほっ

と胸を撫で下ろしました。

今回のニュースを観て、「女性はすぐ医師を辞める」との発言に、違和感を覚えたのはこのせいかもしれません。その後も、先生による診療は続きました。三年前、診察している際に、突然病で命を落とされるまでは。

私が福島に戻ってから、手紙でのやりとりは続いており、伺えなくても先生が診療を続けておられると思うだけで、なんとなく安心だったのですが……。

本当に残念でなりません。

その他にも、優秀な皮膚科だと紹介された女医さんにも、大変お世話になりました。

「東大医学部卒」「皮膚科として乳がん手術を得意とする名医」という気後れしかなない経歴ですが、ご本人は庶民的でとても明るい方でした。

私は、いつもほんの軽い症状での受診でしたが、こちらのもたもたした話からさつと要点を掬い出し、わかりやすく指示をいただけるせい、はたまた快活なお人柄のせいか、伺うだけで心安らぐ存在でした。

このようにお医者さんに恵まれてきたため、福島に戻る際、一番心配だったのは、良いお医者さんに出会えるだろうかということ。

年老いると、お医者さんのお世話になることは、どうしても避けられません。若いころには考えられなかったアクシデントに次々と見舞われ、「老後」という言葉が身に染

みるようになりました。

幸い福島でも、素晴らしい主治医の先生に恵まれたのでありがたいことです。

思い通りにならない体に不満はあれども、不安を感じることなく暮らせております。

とはいえ、こんなにお医者さんにお世話になったり、ご迷惑をかけたりということが、どちらかと言えば健康に恵まれていた自分に起こるなんて、思いも寄らないことでした。

また、「外科希望の女性は少ない」と聞いて、思い出したこともあります。

服飾デザイナーの仕事をしていた時、ある外科医のお客様から、ウエディングドレスの注文を依頼されました。

オーダーメイドドレスのデザインという性格上、もちろんウエディングドレスのオーダーはたくさんありました。が、ご本人が多忙で代わりにお母様がいらっしゃるということは、とても珍しいことでした。

当時すでに、何十年も仕事をしていましたが、それは今までにない依頼だったと記憶しています。

「ウエディングドレスを注文したい。本人は今、北海道で医師をしていて忙しく、学会出席で上京する時に合わせて一度だけ来店できるが、仮縫いなどは北海道まで出張していただけないか」

出張の依頼はたまにあります。が、お嫁さんが忙しすぎて

というのは初めて。少し驚きながらも、事情が分かりましたので注文を承りました。

後日、ドレスデザインを決めるため来店された女性は、厳しい仕事を感じさせないエレガントなお嬢様。やはり時間は全くないようで、ドレスの仮縫いのため自宅にお伺いした折にも、仮縫いとヴェールについてなど必要なことを確認すると、慌ただしく病院に戻られました。

やはりお医者さん、中でも外科医は、想像を絶する激務なのでしょう。その中で結婚され、子供を産み育てる方までおられることに、同じ女性として敬意を表します。

昔よりはずっと、女性の選択肢が増えて差別もなくなっただけですが、まだ高い壁があると思われ知らされた一連の報道。女性の働き方に関しては、まだまだ改善の余地があるようです。

性格や能力によって、仕事の向き不向きがあるのは、男性とも同じ。子供が大きくなるまで、外で働かず側にいてあげるのも、また尊い生き方のひとつでしょう。どういう生き方をするか、道を選ぶのは女性たち自身ですが、職種は違うとはいえ、ひとつの職に邁進してきた人生の先輩として、結婚や出産で夢を諦めることを強いられない時代が、早く来ればいいのと思います。

私の場合は逆に、結婚もせず、なぜ仕事に熱中したのかと問われることがあります。答えに困るのは、強い意志を持ってそういう道を選んだのではなく、ただ目の前の仕事

をこなすうちに、月日が流れていったとしか言えないからです。

ただ単に、ふたつのことをこなす能力がなかったのでしょうか、両親や周りの人が積極的に結婚を勧めてくれていたら、叶えられないこともなかったかと、今更ながら他力本願な「こうではない他の人生」を、思い浮かべたりもします。

私の母は、六人の子供を産み、男ひとりと女三人を育てたしっかりした専業主婦でしたが、口には出さない苦しみも多かったらしく、「結婚なんてしなくていいのよ」が口癖でした。

仕事ばかりの人生だったせいか、とづくに仕事をリタイアしたにもかかわらず、何かの折に顔を出すのは、やはり「職業人としての昔の自分」です。

六十年以上、ファッションの世界で過ごし、身についた習慣はなかなか消えません。新聞や雑誌、テレビで出くわす服飾関連の言葉や画像には、今でも敏感に反応し、似合わない服や場にそぐわない服を着る著名人を見ると、ハラハラしてつい余計なひと言。

かつて同居していた姪に、「カオリさんが洋服のことばかり言うから、肝心のドラマのストーリーが全く頭に入っていない」と、何度苦笑いされたことか。そういう彼女も、大学の専攻のせいで色彩やバランスにうるさく、女性気象予報士の服のウエスト位置がおかしいと、観るたびに

ほやいているので、血は争えないなあと感じてしまうのですが……。

この年になっても、あの時はこうすればよかったとか、こう対応すれば不快な想いをせずにすんだのになど、後悔し反省することはばかりです。

それでも、現実の人生では、エイヤと決めなくてはならないことがたくさんありました。

失敗のない確実な道などないでしょうが、大切なのは自分で考え、納得して進路を決めること。

今回の医大受験問題にかぎっても、大学側の「蛮行」を目の当たりにして、多くの女性は努力が正当に報われない理不尽を突きつけられたはずです。勉強や仕事の過酷さに、夢を投げ出したくなることもあるでしょう。さらに結婚や出産の問題も立ちはだかります。

医師を目指すような優秀な女性に、何も知らない自分が僥越かもしれませんし、自己満足にすぎないとは分かっています。が、「がんばれ！」と心からエールを送りたいと思います。

母と梅干し

梅干し、白菜漬け、ぬか漬け、味噌漬け、たくあん……。昔から日本に伝わる家庭の漬け物が好きです。

長女に生まれた私は、母の手伝いによく駆り出されたものでした。

食事の時間が近づく、と、物置の四斗樽からたくあんや白菜の漬け物、台所の流し台下に置かれた甕からぬか漬けや味噌漬け、梅干しを取り出し、必要なものを準備したことを思い出します。

漬け物を漬ける手伝いもしましたが、福島の冬は厳しく、冷たい野菜に手を触れるのが少し辛い役目でした。とはいえ、自分の家の味は格別。母の漬けた漬け物があれば、食事がさらにおいしく感じられました。

ただし母は、梅干しだけは自分で漬けませんでした。

その理由がわかったのは、だいぶ後になってからです。私はまだ五歳くらい、幼稚園に通う前だったと思います。泊まりに来ていた父方の祖母が、茶の間でひとりお茶を飲んでいました。

「香ちゃん、お母さんは朝忙しいから、おばあちゃまのお茶のお相手をしてくれない？」

そう言われて、私が母に代わり、祖母の相手をしました。

祖母の不満をなんとなく感じたのか、私は何気なく、

「お母さんは赤ちゃんがいるから」

と、母をかばったそうです。当時から、すでに「お姉さん風」を吹かせていたのかもしれませんが。

後になってから知ったことですが、このころの母は心労からかなり痩せてしまつて、その理由は父の女性問題だったそうです。

お茶の相手を私がした少し後、祖母はバタリと我が家に来なくなりました。

どうやらきっかけは、前年に母が漬けた梅干しに、カビが生えていたからだとか。

親戚の間では、私の母が死ぬのではないかと祖母が心配しているとの噂が、広がっていたそうです。

健康志向のため塩分が少ない今の梅干しならともかく、昔の梅干しは、周りに白い粉が吹くくらいの期間は、しっかり日持ちしたものです。その梅干しにカビが生えるのは、家族に死人が出る前兆と忌み嫌われていたのだとか。

ところが亡くなったのは、衰弱していた母ではなく、健康に見えた祖母の方でした。享年六十歳。

それからです。母が梅干しを漬けなくなったのは。

戦時中の弁当は、ご飯に梅干しだけという「日の丸弁当」が定番で、私も作ってもらいましたが、今のように入りにスーパで梅干しなど買えない時代、母はどうやって梅干しを調達していたのだろうか、今でも不思議に思つて

います。

子供たちが大人になって家を離れ、ひとり暮らしになった母は、家の庭木を少し整理して、庭の一部に畑を作って野菜作りを楽しんでおりました。

東京で暮らす私にも、時折その野菜を送ってくれましたが、私の知らない野菜があつて、食べ方を尋ねるため電話したりすると、喜んで長々と説明してくれました。

口には出さなかつたものの、寂しかったのかも知れません。結局九十二歳で亡くなるまで、母をその家でひとりぼっちにしましたことに、今でも胸が痛みます。

墓参りはかつて私の役目でしたが、今年は脚に痛みがあつて、お彼岸にも行けませんでした。

姪に代理を頼み、私の分までお参りをしてくれたそうなのですが、幼い時から父に連れられ、墓参りをしていたので、氣になつて仕方ありません。

墓は本宮の小さな山の上にあります。墓所に登る急な坂に、手すりのない部分があり、弱った脚では危険だというのが、墓参りを思いとどまつた理由です。

墓所からの風景を、こう称するのはどうかとも思います。眼下に広がる本宮の町並みはかなりの風光明媚。しっかり手をつないだ若かりしころの父の指の力とともに、はるか昔の景色を今でもよく思い出します。

本宮は、戦時中に爆撃を受け、大きな被害がありました。山の麓にあつた製糸工場が、当時軍需工場として使わ

れていたため、標的にされたそうです。

空襲の爆風を浴び、お寺さんも本堂の天井が剝がれるなど、大変な目に遭い、子供心にも戦争の恐ろしさが身に染みました。

現在眼下に広がるのは、住宅の立ち並ぶ穏やかな光景。平和はありがたいことです。

忙しく東京で働いている時も、当時は元気だったのか、ただ単に氣力で持たせていたのか、墓参りは欠かしませんでした。

まだ新幹線がない時代も、列車に飛び乗つて墓参りをして、すぐトンボ帰りをする。そんな慌ただしい滞在で、母に会わずに帰ることもたびたび。本宮なので、福島ではなく郡山から行つた方が早いと、そちらで下車して、福島市まで来ないこともありました。

服を作るアトリエの方は休みでも、銀座通りにあるサロンは、夏休みを利用して上京するお客様もいらしたため開店していたので、デザイナーとして夏休みを取ることもなど論外でした。

若かつたころは、母のことより仕事を優先。その結果、「仏壇を守らない」という母の言葉に甘え、長くひとり暮らしをさせる結果になってしまいました。

申し訳ないという気持ちに代えて、病院に行く時にもも着て欲しいと、私は新しい服を作つては、母に送り続けました。

本当は和服が好きだったはずですが、娘の立場を考えて、私のすぐ下の妹の結婚式にも、洋服で出席してくれたものです。

「洋服で出席するから、よろしくお願いね」と言われ、とてもうれしかったことをよく覚えています。

亡くなった後、遺品を整理すると、まだ手を通していない何着も含めて、母のために作った沢山の洋服が残されていました。

大切にしてくれたようで、ほとんど傷まず残されたそれらの服は、母がお世話になったご近所の方々がもらって下さいました。現在のように高齢者向けの服が、多く出まわっていた訳ではないので、普段着まで一着残らずお持ちいただいたいて、少しは母の供養になったかもしれない、そうであればいいと思っています。

母は、新潟県三条の生まれで、この辺りは日本有数の豪雪地帯。冬には、雪に埋もれた電信柱の上の方が、ちよつとだけ雪の上に出ているのを目印に、小学校に通ったそうです。

生まれた家の庭には、果物の樹が色々あったので、木登りをしてはその実を採って食べるのが楽しみだったとか。

女性らしく線が細かった母ですが、実はかなりお転婆だったようですね。

最後まで住んでいた家の庭には、花咲く樹はあるけれど、果物の成る樹がなくて寂しいとよく言っておりまし

た。野菜を育てはじめた裏には、そんなこともあったかもしれません。

父が健在の折りには、不満もたくさんあったでしょうが、子供には一切話しませんでした。父の悪口は何ひとつ聞いたことがありません。

結局、長女の私が中学生になり、ようやく様子が分かった、生意気にも父に文句を言うようになりました。

しばらくたってから、ようやく正常な家庭に戻りましたが、母は長い間このころの父については、無言で通しておりました。

成人してからは、世間のことも知り、必要悪というものがあると分かるようになりましたが、家庭が壊れず、子供たちが無事に育ったのは、全て母が忍耐強かったためと思っています。

今も心に残るその事件の心の傷とともに、あの梅干しにカビが生えたころの痩せてしまった母の姿を、忘れることはありません。